

北海道朝霧会に参加してきました。

産業開発青年隊同窓会
会長 鈴木 浩明

令和6年6月15日(土)～16日(日)にかけて、北海道朝霧会に参加するため、釧路市に行ってきました。参加者は、昭和39年度国内班 木下 政喜先輩、昭和46年度高等科 福岡 功和 先輩、昭和48年度高等科 栗田 富夫 名誉会長、同じく平井 雅之 副会長、同じく渡村 保男 北海道ブロック会長、昭和62年度海外課程 鈴木 英毅 北海道朝霧会会長、平成1年度 高等科 金子 茂 君、そしてわたくしの8名です。木下先輩は、同期で初代会長の升ノ内先輩と産業開発株式会社を立ち上げ、現在は、株式会社サンテックインターナショナルに社名変更し、升ノ内会長亡きあと、代表取締役就任、現在は会長を就任されています。

栗田先輩は、株式会社建設システム(KENTEM)を創業し、現在、会長に就任されています。テレビCMで皆さんもよくご存じだと思います。

福岡先輩は、北海道釧路市のゼネコン、市橋建設株式会社の副社長です。会社規模は、従業員数約50名とお聞きしています。渡村先輩も市橋建設株式会社でお勤めになっています。

平井先輩は、北海道帯広市で有限会社 平井測研をおこし、現在、代表取締役会長です。先進的な事業を取り入れ、活躍されています。

鈴木朝霧会会長は、厚真町で、株式会社 丸斗工業 代表取締役として活躍されています。

総会での、話題で多くを占めたことは、やはり今後の同窓会活動についてです。一部の会員に負担が大きくなる現状です。現在は、富士宮市に事務局があるため、東海ブロックの若手に大きな負担がかかっています。事務局員に対する、報酬を考えていかなければならないと思われます。そのために、年会費の増額や、南会費未払いの会員への対応を考えていかなければなりません。年会費や、協賛金を収めていただける方は、この数年横ばいであり、同一会員が納めていただいている状況です。

そのため、未納者には郵送をやめ、ホームページで会報を閲覧していただくのも一つの方法と考えます。また、納付についても、ホームページより対応していただくことも考えていかなければならないのかもしれないかもしれません。

あと、どのようにしたら、同窓会活動に参加していただくことができるかを考えていかなければならないでしょう。

参加していただける会員の多くは、40年代卒業の会員がほとんどです。

会員の認識として、40年代の会員は、産業開発青年隊。50年代の会員は建設大学校という認識が多いのではないのでしょうか。昭和38年に静岡県富士宮市朝霧高原に建設省産業開発青年隊の、聖地である建設省建設大学校中央訓練所が、開校し寝食共にしながら、寝食共にし、技術研鑽し、切磋琢磨し、国内や世界へ羽ばたいていきました。中

中央訓練所開設の10年間は、長澤先生も、隊員と寝食共にしながら、青年隊教育を実践してきたのではないのでしょうか。

昭和50年には、4年次海外課程が創設され、海外雄飛に夢を持つ若人のための、実践を伴う教育機関が設立されました。このころより、産業開発青年隊という創設からの位置づけから、建設省建設大学校という、4年制大学のような位置づけを、隊員は考え始めたのではないのでしょうか。実際には、教育機関における位置づけは、短大並びに各種専修学校という位置づけであり、4年制大学卒業には、なれなかったのであります。

昭和57年3月に、長澤亮太先生が建設省を退官されました。この時より、産業開発青年隊の理念に対する考え方が少しずつ変化していったのは、建設省の判断が大きかったのは事実だと思います。

長澤亮太先生と、肌と肌が触れ合い、寝食を共にする教育を受けてきたのが、昭和40年代の会員の方々であり、われ産業開発青年隊と、誇りを持っている方々もこの年代の隊員各位だと、思います。

昭和58年に産業開発青年隊創設30周年記念大会が建設省建設大学校中央訓練所で開催されました。体育館で懇親会が開催され、現役隊員が会場設営及び片づけをいたしました。私は、現役隊員でしたので記憶いたしています。

寮内を闊歩する先輩方、事務所内で、大きな声で話をする先輩方、そして懇親会後に食堂で、現役隊員と2次会を行い、熱き思いを語る先輩方、その当時には、大変異質に感じたのは事実です。自分たちの隊員時代が、青年隊だという自負があるのも、事実だと思います。

なぜ、40年代の先輩方と、50年代以降の隊員との、情熱の差があるのかは、以上の要因がかかわっているのだろうと、考えています。

今後の産業開発青年隊同窓会活動を、活性化させていくためのヒントがこの中にあるのではないのでしょうか。



左より 平井副会長 鈴木会長 鈴木北海道朝霧会会長



左より 福岡前副会長 金子会員 木下前副会長 鈴木会長